

ナー社に送った。校正刷りの写しをポアンカレとシュワルツに、そして例えばフルヴィッツにも送らせた。そういうわけで、クラインもまた着想を得たことで不眠の夜を過ごしていた。」

彼の苦勞の産物は長い論文「リーマンの関数論への新しい寄与」[19]として出版された。ライプチヒで1882年・1883年の *Mathematische Annalen* 第21巻に出版された。まもなくそれはミッタク・レフラーの1882年に刊行された *Acta Mathematica* 第I巻のポアンカレの2つの長編論文[26], [27]と比較されることになる。

さらにクライン自身の告白といえるもの続く。「もっとも私が自分の研究に支払わねばならなかった代価は途方もなく高いものについた；それは私の健康が完全に損なわれたということである。翌年私は繰り返し長期の休暇をもらい、あらゆる創造的活動を断念せざるを得なくなった。ようやく1884年秋になって回復したが、もはや創造が以前の水準に達することはなかった。…(中略)…私がその後保型関数にはごく稀にしか触れなくなったことに納得されるであろう。理論数学の分野における私本来の創造的活動は1882年で終息したのである。それ以後のものは、旧作の校訂に関するものでないかぎり、すべて枝葉末節にすぎない。」(クライン[2], 391ページ参照) 彼の人格の中の競争心は彼を厳しすぎるほど掻き立てたようで、ふたりの数学者の間の「競争」を作った。

それに続くべきクラインの思いはクライン[3]の冒頭にある。「正20面体の理論は最近数年の間に現代解析学のほとんどすべての分野で重要な地位をしめているので、体系的な解説書を出版することは意義がある。これが受け入れられるならば、同じ方向で継続して、同じような方法で楕円モジュラ関数と、最近現われた1次分数変換に伴う1価関数の一般論を主題として同じような意味で取り扱うことを提案したい。」ここで言及している著書がフリッケ(R. Fricke)との共著[10], [20]であろう。公約を実行したことになる。

ところで、先に引用した文章の末尾には「それ以後のものは、旧作の校訂に関するものでないかぎり、すべて枝葉末節にすぎない。」とある。本当の気持ちを述べているのかどうか大変気になる部分である。

6.2 ポアンカレの著作からの抜粋部分

ポアンカレ自身が数学上の発見のもっとも著名な記述の1つを残していた。それはフックス関数論についての正確な彼の発見の道筋に關している。それはよく知られているけれども、通常の資料からでは、フックスとの往復書簡といかにしてそしていつ関連しているのかは明らかではない。手紙のやりとりのあったその年である1880年でさえ、言明されないままである。ポアンカレはこの解説を1908年のパリでの心理学学会での講演で与えた。そしてその内容は彼の著作「科学と方法」[28]の第3エッセーとして出版された。

「2週間の間、後にフックス関数と名づけることにした関数と類似のものが存在しないことを私は証明しようとした。その頃、私はまったく無知だった。毎日、私は自分の机に向かって座って、1, 2時間過ごした。私は数多くの可能性を試みたが、決していかなる結論にも到達しなかった。ある晩、習慣に反して、私は1杯のコーヒーを飲んだ。私は寝付かれず、アイデアが数多く押し寄せて、それらがたがいにぶつかり合うのを感じて、そ